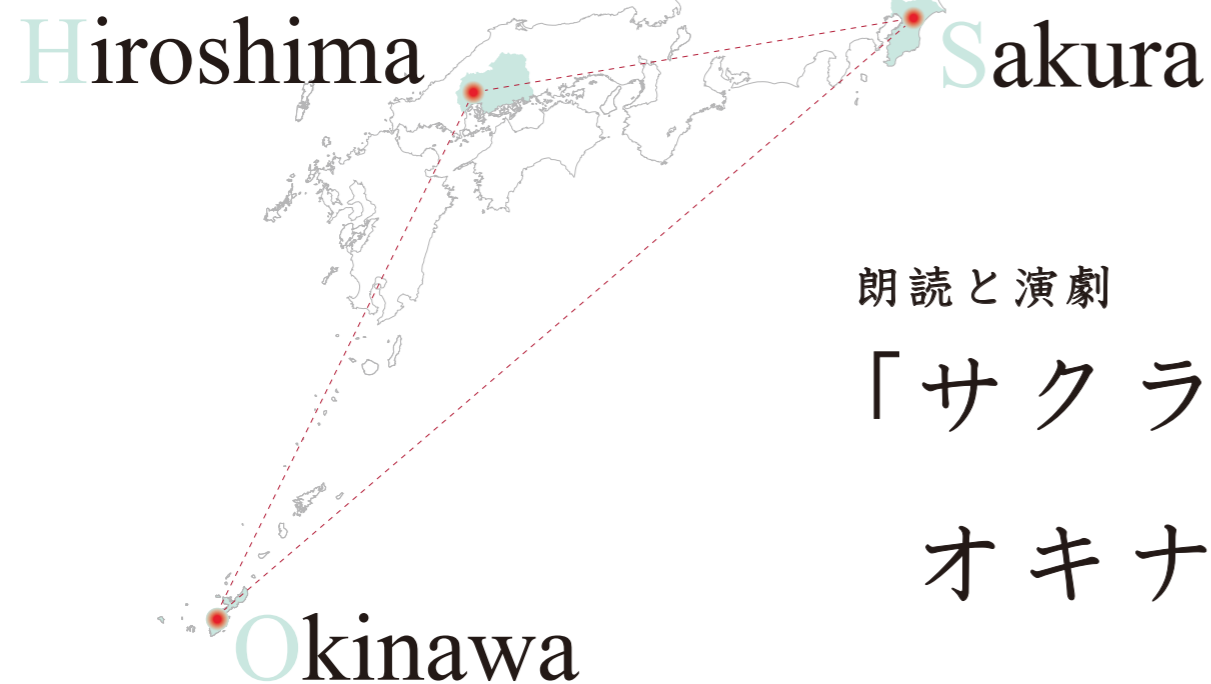


この
サクラ
から馳せる
オキナワ・ヒロシマへの想像力



朗読と演劇
「サクラ
オキナワ
ヒロシマ」

2009.11.14 SAT.

14:00-15:45

千葉県立佐倉東高等学校
会議室

13:30- 開場
14:00-14:30 朗読『SAKURA/OKINAWA』（構成=佐倉東高校演劇部）
14:30-14:45 休憩
14:45-15:45 演劇『父と暮せば』（作=井上ひさし）
《千葉県高校演劇中央発表会プレ公演》

千葉県立佐倉東高等学校演劇部

T E L 043-484-1024
EMAIL gekibu@gmail.com
B L O G <http://engekibu.seesaa.net/>



「人間のかなしいかったこと、たのしいかったこと、それを伝えるんがおまいの仕事じゃろうが。」（「父と暮せば」より）

Reading

cast:
古澤 通
野宮友萌香
豊岡 美枝
鶴川 祐奈
吉田雄太郎
岡田 夏美
植草 宏美
田中 志穂
鈴木由利香



2009.01.30-31 (ミレニアムセンター佐倉ホール) 初演
2009.07.26 (成田国際文化会館大ホール) 再演

朗読『SAKURA/OKINAWA』について

SAKURA 佐倉東高等学校が佐倉高等女学校だった時代、1945(昭和20)年に卒業した同窓生の文集『丹鈴』。そこには、太平洋戦争「開戦の年に入学し、終戦の年に卒業」した同窓生の稀有の体験が綴られている。リーディング前半は、この体験記の文章を再構成し、佐倉東高の現役生・卒業生がこれを朗読する試みである。

OKINAWA 次いで、伊波園子著『ひめゆりの沖縄戦 少女は嵐のなかを生きた』『沖縄戦前夜』の章を朗読。そこには、米軍が沖縄本島への艦砲射撃・空爆を開始する1945年3月23日以前の、ひめゆり学徒の日常が描かれている。

SAKURA / OKINAWA 沖縄と佐倉という、遠く隔たった二つの地点ながら、彼方と此方の状況がオーバーラップし、そしてその同時代性を浮かびあがらせる。日常のなかにじわじわと浸潤してくる戦争。が勿論その後、1945年3月23日を境に、彼方と此方の命運は大きく分かれたことになる――。



cast:
鶴川 祐奈
吉田雄太郎

Drama

2009.10.11 (成田市民ホール) 第7地区秋季地区発表会最優秀賞
2009.11.20-22 (青葉の森公園芸術文化ホール) 第62回千葉県高等学校演劇研究中央発表会参加予定

演劇『父と暮せば』上演に寄せて

愛するものを失ってなお永らえること。生きのこることもまた苛酷なのだ。高校時代、古典の時間に「後（おく）る」という古語をはじめて習ったときの奇妙な感慨がよみがえる。習ったのは、「（誰それ）に後る」という用法である。親しい人に先立たれること、死別することを「後る」という。わたしの身近で誰かが亡くなるとき、わたしはその人に「後れた」のだ。周囲で1人また1人と亡くなっていき、そして、わたしはまたぞろ「後れる」、どんどん「後れる」。生きつづけることは、すなわち「後れつづける」ことにほかならない。

この劇の舞台は原爆投下から3年後の広島。美津江は、原爆で親友にも肉親にも先立たれ、ひとりひっそり永らえている。ある日、美津江は勤め先の図書館にやって来た木下という青年に恋をする。けれども、自分1人生きのこった後ろめたさから、その恋も断念しようとする美津江。「うちはしあわせになってはいけんのじゃ」。そんな美津江を、父・竹造は懸命に励まし応援するのだが――。言わずと知れた、井上ひさし氏の名作。

『父と暮せば』のラストシーンは、長編ドキュメンタリー映画『ひめゆり』のなかの、ある元ひめゆり学徒の生存者の方のことばを想起させる。その生存者の方は「ここから生き残ったのではなく、生き残された」といい、「（亡くなった人たちは）何としても生きてかったですよ。それを今、私に伝えてくれ、と言ってるように思えるんです」と語られていた。『父と暮せば』にもまた映画『ひめゆり』同様「生き（のこ）ること」の意味への深い洞察がある。

映画『ひめゆり』がドキュメンタリーであるのに対し、『父と暮せば』は、なるほどフィクションといえどフィクションである。だが、作者の井上ひさし氏は、こう書かれている。「（被爆者の方々の）手に入った手記を数百篇、拝むようにして読み、そこからいくつもの切ない言葉を拝借して、あのときの爆心地の様子を想像しました。そして、それらの切ない言葉を再構成したのが、この戯曲です」と。ここに紛れもない真実がある、そう観客をして感じさせる所以である。